
とある魔術の断罪者

漆黒の墮天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の断罪者

【Nコード】

N0394Y

【作者名】

漆黒の墮天使

【あらすじ】

悪魔の力をもってしまった少年

周りから避けられていた孤独な少年に笑顔を向けた少女がいた

そして、少年は周りの人を守るために力を振るう

これは少年の物語

第零話 主人公紹介（前書き）

どうも、漆黒の墮天使っすー

前は突然やめてすみませんでした

今回はちゃんと完結できるようにがんばります
では、どうぞ

第零話 主人公紹介

名前 アリス・グラシオン

性別 男

年齢 15歳

容姿 ファイア・イン・キューブのまんま

一人称 僕

魔法名 amicuss007 (我が命は友のために)

詳細

イギリス清教必要悪の教会に所属している

主人公は恋愛に関しては超がつくほど鈍感

インデックス、ステイル、神裂とは小さい頃に出会った

また、第三王女とも一度出会っているがその時は仕事の時だったためローブで顔を隠していたため第三王女にはアリスだということが分かかってない

悪魔の力を使うため最初は避けられていたが、インデックスのおかげで現在は避けられていない

仕事の時は常に黒いローブをしている

十人中十人に女だと間違えられる

また、料理もかなりできる

二つの名は暗黒の断罪者

第零話 主人公紹介（後書き）

どう、漆黒の墮天使です

今回は魔術師という立ち場で書きます

では完結までがんばります

第一話 プロローグ(前書き)

今回はプロローグです
それでは、どうぞ

第一話 プロローグ

学園都市

人口230万人、その8割が学生という科学と超能力で支配された街
その町に彼らはビルの屋上にいた

一人は赤い髪で背が高く煙草を吸っていてタトウーをしている男、
一人は長い刀を持ち世間で美人と言える女性だかシャツやジーパン
の右手と左足のところがバツサリ切られてあった。そしてもう一人
は背が小さいがローブをしており顔が見えなかった。

『タイムリミットは？』

黒いローブを被っている人が言った

「あと2週間ぐらいですね、そろそろ彼女を保護しなくてはなりませんね。」

長い刀をもっている女性が言った

「まあ今回は阻止しようとする奴も居ないし、すぐに保護ができるだろうな。」

赤い髪の男がそう答えた。

『ステイル、油断していると足を掬われるよ？』

ローブをしている人が赤い髪の人に言った

「君こそ、足元を掬われないようにすらんだな・・・神裂あの子は見つかったか？」

「今あの子の歩く教会の魔力を探っています。もう少しで見つかると思います。」

神裂は眼を閉じて集中をした

「・・・見つけました、ここから600mほどのところですよ。」
ローブをしている人が立ち上がり言った

『よし、あの子を保護するぞ』

そして立ち上がり三人は向かった

「……………はあ…はあ」

一人の少女が走っていた

その格好は白色の修道服をしており

夜の裏通りを走っていた。

彼女は逃げていた。

誰かも分からない魔術師から逃げていた。

目的はすぐに分かった。

彼女の中にある10万3000冊の魔道書だ

魔術師がそれを狙っていると思った。

彼女は一年前の記憶がなくなっていたため

何故日本にいるのか、何故自分は魔道書のことばかり覚えていないのか分からなかった

ただ分かることは、イギリスのロンドン出身でイギリス清教の『必要悪の教会』所属だったこと

魔道書の内容、そして、自分の手元にあった写真

その写真には水色の髪していて眼の色は紅く小柄な美少女に見えるが少女は何故か少年だということが分かった。

『見つけたよ』

少女は逃げる。

魔道書を悪用されないように

そして、写真に写ってる少年に出会うために
そのために少女は逃げる。

第一話 プロローグ（後書き）

漆黒の墮天使です。

誤字・脱字がありましたらご指摘下さい

明日も更新できたらします

では、今回はこれで

第二話 禁書目録（前書き）

どうも、漆黒の堕天使です。

今回は上条さんがインデックスのと出会ったところ
では、じいじ

第二話 禁書目録

学園都市に住む高校生

上条当麻は不幸だった。

不良に追いかけてまわされたり、学園都市のLEVEL5の超能力者で常盤台中学のお嬢様に追われたり

そんなことが彼は毎日のように行われているのだ。

そして、今日は彼が待ちに待った、夏休みだったのだが……担任の月詠小萌先生から電話で

「上条ちゃん馬鹿だから補修です」

とラブコールを受けたのだった

「不幸だ……」

これが彼の日常だった

そして、彼は布団を干そうとベランダに行ってみると年下の女の子が干されていたのだ

少女の格好は白を強調した修道服だった

上条はまた、面倒なことになるだろうなと思っていたさらには……

「私は魔術師に追われているんだよ……」
とオカルトチックなことを言った

なんで追われているかというと

どうやら彼女の10万3000冊の魔道書を狙われているらしい

「んで、その10万3000冊ってのは何処にあるんだ？倉庫の力ギでも持ってるのか？」

と聞いてみると……

「ここにあるよ、一冊残らず持ってきてるもん」
そう言われても信じれなかった

どこにもそんな本は見当たらないから

上条は魔術を見せてみると要求してみると……

私には魔力が無いから魔術は使えないの」

当麻が電波だインチキだと言うと、超能力を見せると言いはじめた
ちなみにこの学園都市に住んでいる学生は
カリキュラムというのを受けているため

ここの学生は、ほとんどの人が超能力をつかえる
そして上条当麻に特別な能力が生まれたときからあった。

「まあ、俺も、生まれた時から妙な力をもってるんだけど・・・」
「妙な力？」

とインデックスが聞いてきた。

「俺の右手に触ると、異能の力なら電撃だろうが超電磁砲だろうが、
たぶん・・・神様の奇跡も打ち消せます」

と、上条は言った。

「・・・・・・ぶっ」

とインデックスは馬鹿にしているような眼をした

それからどんどん口喧嘩がエスカレートしていき・・・

そして上条の能力を信じないインデックスに

「じゃあ、なにか見せてみるよ、それを右手で打ち消せば、右手の
ことも信じるしかねーよな」

と言った。

それでインデックスもそれに乗り・・・

「いいもん、じゃあ見せてあげる、これ、この服」

とインデックスは修道服を少し上げて言った

「これは、『歩く教会』って言う国上の防御結界なんだから。」

「なんだそれ？さっきからわけの分からない専門用語ばっかし打ち
込みやがって、意味わかんねーよ」

と言い・・・

そこからインデックスは上条の発言に怒り、台所の包丁を取った

「だったら、これが証拠、これで私のお腹を刺してみる」
と言いはじめた。

「な・・・なんだよそれ？」

と、上条はちよつと戸惑つた声で言った

「これは教会として必要最低限の要素だけを詰め込んだ服の形をした教会なんだから、包丁で刺したぐらいじゃ傷一つつけられないんだよ」

「じゃあグツサリ刺してみますなんて、馬鹿のことを言うわけねーだろ」

と言つたが……

「とことん馬鹿にして……これはトリノ聖骸布を正確にコピーしたものだから強度は絶対なんだよ、物理、魔術も問わず全ての攻撃を受け流し吸収しちゃうんだから」

と言つが、上条は

「ふーん、つまりあれだ、それが本当に異能の力だつていうんなら俺の右手が触れただけで木っ端微塵つて訳だな？」

と上条は冷静に答えた

しかしインデックスはその発言に馬鹿にするような言葉で言い

「君の力がホ・ン・モ・ノ、ならね」

と言つた。

上条はお人好きだが、心はそこまで広くないので……

「上等だ！ やつてやるよ！」

と言い、勢いよく立ち上がりインデックスの右肩を掴んだ

「……あれ？」

「何も起きないんだけど？」

とインデックスは勝ち誇つたように言つたが次の瞬間……

バサッ！

インデックスの修道服が木っ端微塵になつてしまった

つまり当麻はフードを被せているだけで裸なインデックスと凝視している形になる訳で……

ガブッ！

「ぎゃあああああああ！！！！！！！！」

そして上条はインデックスに噛み付かれた

「たくつ、あちこち噛み付きやがって……合宿のときの蚊がよ……お前は」

とぼやいた上条のところどころにインデックスの噛み付いた後が残っていた

一方インデックスは鬱な状態になっていた

「さつきには、俺が悪かったよ、だから……」

と誤ろうとした瞬間目覚まし時計が上条のところへ飛んできた。

そしてインデックスは睨みながら言った

「あれだけのことがあったのにどうして普通に話かけられるんだよ……」

「いやノノ……俺だって大変どきまきしているというか、なんとというか……」

と少し頬を紅くしながら上条は答えた

「馬鹿にして……」

とインデックスは睨みながら言った。

「うん？」

上条は下に写真らしきものを見つけた。

そこには二人の子供がいた1人はインデックスだろうそしてインデックスに抱きつかれている水色の髪の毛をしており紅眼で背はインデックスと同じくらいの子と一緒に写っていた。

「これお前のだよな落ちてたぞ」

「あ……ありがとう」

「何でお前がこんな昔の写真を持っているんだ？」

「……分からないでも、その人に会うのが私の目的だもん」

「ふーんそれにしても、お前と写っている女の子に会うためにこっちに来たのか？」

「こっちにいるか分からないけど、でも、分かることはこの人は女の子じゃなくて男の子だったことは分かる」

「はあ？だってこの写真の写ってる子はどう見ても女の子にしかみ

えないけど……」

「でも、何故かこの人のことは男性だということが分かるだよ」

「ふーん……」

~~~~~

しばらくして、やっと修道服が元の形に戻った

出ていく事にするらしい、ここに居ると魔術師が来るかもしれない  
と言って

行く宛があるのか聞くと、教会まで逃げできれば匿ってもらえるよう  
だ、

付いていこうか？と聞くとインデックスは

「じゃあ、私と一緒に地獄の底まで付いてきてくれる？」

と笑顔で言った。

上条は付いていくとは言えなかった。

インデックスは付いてくるなと言いたかったんだろう。

上条はそう感じたから付いていくなんて言えなかった

「何かあったらいつでも来ていいからな！」

上条はそれだけしか言えなかった

「アイツ、フード忘れていきやがった……」

まあ大丈夫だろうと上条は思っていた。

しかし、上条が知らない間に悲劇が起きる。

まだ、そんなことを知らない上条は補修の準備をした。

## 第二話 禁書目録（後書き）

どうでしたか？今回の話は

誤字・脱字がありましたらご指摘下さい

あと、感想などあれば嬉しいです。

では、今回はこれで

### 第三話 動き出したもの達（前書き）

どうも、漆黒の堕天使です。

今回は上条とオリ主とステイルの戦闘です  
では、ごきげん

### 第三話 動き出したもの達

インデックスが上条の寮を出て行くときそれを見ていた者達がいた。魔術師だ。

『動きだしたようだね……』

アリスは寮から出たインデックスを見ていた。

「アリスどうしますか？」

後ろにいた神裂がアリスに言った

『決まっている、あの子を保護するよ』

アリス達は動き出した。

ステイルが人払いのルーンを刻み、インデックスを一般人と離れた。インデックスもルーンに気づいたが、ルーンの範囲が広がって逃げ出せなかった。

後ろから魔術師が追ってきた。

インデックスは背を向けて逃げようとしたが

その背中を神裂が切り裂いた。

二人共『歩く教会』が効いているから大丈夫だろうと思った。

だが……

インデックスの背から大量の血が噴出した。

『な！……なんで『歩く教会』で守られているはずなのに！』

『そんな……『歩く教会』があるはずなのにっ！』

インデックスは重傷になったにも関わらず、路地裏を逃げ出した。

『くっ、ステイル！、早く戻ってきて！あの子を見失ってしまった

！早くしないと死ぬぞ！』

神裂はインデックを切ってしまったことにショックしているため、別の場所へ移動することにした。

~~~~~

『落ち着いた？』

「ええ、すみませんでした……」

アリスはビルの屋上に移動していた。

ステイルが現在インデックスを追っているだろうと思うが

あいにく彼には回復魔術の知識は無い。

『神裂、僕はステイルを追うよ、『歩く教会』を破壊できる人がいたら、ステイルじゃ勝てないだろうし』

「お願いします・・・」

アリスは向かう

上条とステイルの戦闘をしている場所へ・・・
インデックスの元へ・・・

一方ステイルは上条に保護のことを言っていた。

「保・・・保護？」

「そうだよ・・・そうさ、保護だよ保護」

ステイルのこの発言に上条は啞然としていた

「ソレにいくら良識や良心があつたつて拷問や薬物には耐えられないだろうしね。そんな連中に女の子の体を預けるなんて考えたら心が痛むだろう？」

ステイルのこの言葉に上条はキレた

「テメエ、何様だっ！」

上条は右拳で殴ろうとしたが、魔術師はそれをすんなりかわした。

「ステイル」マグヌスと名乗りたいところだけどここはFortis 931と言っておこうかな、日本語では

強者と言ったところかな、まあ語源はどうだっていい」

ステイルはそう上条に言いこう告げた。

「魔法名だよ、聞き慣れないかな？僕達魔術師って生き物は魔術を使う時に名前を名乗ってはいけないそうさ、古い因習だから理解できないけど、重要なのは、魔法名を名乗りを上げたことだ、僕達の間ではむしろ・・・」

ステイルは煙草を捨てながらこう言った

「殺し名かな？」

ステイルは言い告げた。

「炎よ」

ジッ、ヴォ ヴオオオオオオ

炎が一瞬のうちに膨れ上がり巨大な炎剣と化した

「これが・・・魔術」

上条は魔術の威圧に圧倒されていた、そして・・・

「巨人に苦痛の贈り物をつ！」

摂氏3000度の炎剣が上条を襲った。

「ふうーやりすぎたかな？残念だったね、まあそんな程度じゃあ、何回やつても勝てないってことだよ」

ステイルは上条が骨ごと消えたと思った。

しかし・・・

「誰が」

「うっ？・・・」

ステイルは前を向いた。

そして、見た、上条は生きていた

しかも、ほとんど無傷の状態で

「誰が、誰が何回やつても勝てねえって？」

ステイルは驚いた。

摂氏3000度の炎を直撃したなのに生きていることなんて、ありえないからだ。

「たく、そうだよなにびびってるんだ、あの修道服をぶち壊したのなだつてこの右手だったじゃないか」

上条に自信がついた。

「くっ・・・こんのー！」

ステイルはもう一度炎剣を放った

だが、炎が上条の右手に触れると同時にガラスが割れるように四散して消えた。

そしてステイルは確信をした。

「そうか、やっと分かったよ、『歩く教会』が誰に破壊されたのか」

そう言ってる間にも上条は間を詰める

そしてステイルは自身が使える最大の魔術を使おうとしていた。

「世界を構築する五大元素の一つ 偉大なる始まりの炎よ」

「それは生命を育む恵みの光にして」そこまでだよ、ステイル」何をしに来た、アリス」

ロープの人間ことアリスがステイルの後ろの階段上がってきた。

「初めまして能力者、その子をこっちに渡してくれるかな？」

「いきなり現れて何言ってるやがるっ！大体テメエ等は女の子を傷つけて何とも思わねえのかよっ！」

「僕だつて、こんなこと予想外だったんだよ、それに早くその子を治療しないと、死ぬよ？」

「テメエッ！」

上条は本気でキレた。

自分達で怪我をさせといて、早くこっちに渡さないと死ぬ。

上条にとってアリスの言ってることは許せなかった。

「しょうがない、無駄な戦闘は避けたかったけど」

そしてアリスは告げた

「僕の魔法名はamicus007、君を殺す名だよ」

そしてアリスは懐からナイフを取り出した。

そして、自分の中指を切った。

上条は、こいつ何がしたいんだ？と思った。

しかし血は床には落ちず魔法陣を描きだした

「我が血を生贄に、嫉妬の炎となり、そのものを焼き尽くし、永遠の地獄を！」

そう言うときアリスの手から紫色の炎が膨れ上がって、そして放った。

「嫉妬の炎、レヴィアタン、当たれば地獄をあじわうことになるよ」

レヴィアタンは上条へと襲い掛かった。

「くっ！」

右手では大きすぎるので、上条は床を転がって回避した。

上条の後ろにあったエレベーターに点火して跡形もなく燃やされた。

「なっ！・・・何だよあれ！？」

そして、アリスはもう一度レヴィアタンを放った。

アリスは今度こそ上条に確実に当たるように放った。

そして、上条は右手を突き出すとレヴィアタンを受け止めた

『なっ！・・・』

驚いたのはアリスだ。

レヴィアタンは全てを焼き尽くす魔術

元々アリスの使っている魔術は悪魔の力を使っているため異端だ。

そしてこの魔術はアリスの使う魔術でかなりの上位にいく魔術だからだ。

そして、ステイルも言葉を失っていた。

本来『レヴィアタン』は当たれば、そのものを燃やし尽くすまで炎が消えない。

つまり、当たれば死ぬということだ。

一方上条も驚いていた。

学園都市の超能力者LEVEL5の第3位電撃すら打ち消すが右手が全くと言っていいほど本来の機能を発揮していない。

「うおおおおおおお！！！！」

上条は右手で左手を押さえ『レヴィアタン』を受け止めた。

そしてアリス達には背を向ける格好になってしまっていた。

『ステイル、本気でいつてよ・・・』

「分かっているさ、……我が身を喰らいて力と成せ！『魔女狩りの王』イノケンティウスその意味は必ず殺す」

ステイルの服の内部から炎が吹き出し、そして炎の巨人とかした

『魔女狩りの王』が上条を襲う。

幻想殺しが宿っているのは右手だけ、上条はとっさに寮から飛び降りた。

『レヴィアタン』と『魔女狩りの王』はぶつかり合った瞬間、レヴィアタンとイノケンティウスが相殺した。

『・・・ステイル今回は退くよ』

「何故だ！僕はまだいける！」

『おそらくあの、能力者もステイルの弱点を見つけたと思うから』
「そんな馬鹿な！」

『おそれくあの能力者はスプリングラーとか使うだろうしね』

「それだけじゃあイノケンティウスを倒せないはずだ！」

『はあ……じゃあそのルーンの用紙のインクはどうなる？』

「まさか……」

『そういうこと』

「なら！早くこの子を保護してっ！」

『それも無理だよ、僕達には武器はないし、それに向こうはまだ万全だから、それにこれ以上続くとあの子が死んでしまう』

そしてアリスは密かにメモに魔術を使う条件を書いておいた。
もちろん方法は書かなくていい。

10万3000冊の魔道書があれば大丈夫だと思ったから

第三話 動き出したもの達（後書き）

今回の話はどうでしたか？

誤字・脱字がありましたらご指摘下さい

あと、感想などあれば嬉しいです。

それでは、また

第四話 悲しい現実（前書き）

どうもー漆黒の堕天使です

昨日文化祭だったので今日休みになったので書けました
では、どうぞ

第四話 悲しい現実

インデックスは助かった。

あの後小萌先生のところへ行き、魔術によって傷を治癒した。

何故上条が小萌先生の所へ行つたかというところ・・・

能力者には魔術が使えない、使えるのは普通の人間だ。

上条はこのメモを見たときに、カリキュラムを行っていない教師小萌先生のことを思い出し、急いで行つた。

学園都市で能力開発をしているのは生徒だけ

つまり大人は普通の人間なのだ。

小萌先生はインデックスが言つた通りに魔術を使つた。

そしてインデックスは、最後まで人のことを思っていた。

~~~~~

次の日インデックスは風邪に似たような症状が起きた。

傷が塞がっても体力はどうにもならない

ただでさえ魔術師達にインデックスはひたすら逃げていた。

なので体が体力を補おうとしているのだろう。

当麻は小萌先生を巻き込みたくない、そう言つたと小萌先生は席を外した、帰つてきたら忘れてるかもしれないと言つた。

当麻はインデックスの抱えていることを聞いた。

それは、あまりにも辛く、自分が散々不幸だったけど、それを軽く超えていることだった。

そしてその光景を見ている人達がいた。

魔術師だ。

『・・・何とか生きていたね』

彼らはビルの屋上にいた。

「彼女に同伴していた少年の身元を探りました。」

「で？あの右手はなんだつた？」

ステイルは神裂に聞いた。

それに神裂は答えた。

「少なくとも魔術師や異能者と言った類ではない、としか」

神裂の答えにアリスは答えた。

『神裂、ちゃんと僕が言ったようにやった？』

神裂は機械オンチなのだ、ちなみに今回はハッキングの作業だ。

「も、もちろんです」

ステイルは煙草吸いながら答えた

「情報の意図的封鎖かな、しかもインデックスの傷は魔術で癒したときた神裂、この極東には

他に魔術組織は実在するのかい？」

ステイルは神裂に聞いた

「学園都市で動くとなれば、何人もここのアンテナにかかるはずで、敵戦力は未知数対してこちらの増援はなし」

『どちらにしても厄介だということには変わりないよね』

アリスはそう答えた

「珍しいにね、君が仕事でそのローブを被らないなんて」

ステイルの言った通りアリスはローブのフードを被っていなかった。

その姿は小柄な少女のようで髪の色は水色で美しくそして紅眼

どうみても少女にしか見えないが、アリスは男だ

そしてインデックスが探していた写真の人物でもあった。

そしてアリス達はじゃれあっているインデックスを見ていた。

そして最初にステイルが呟いた。

「楽しそうだね、本当に楽しそうだ、あの子をいつでも楽しそうに生きている、僕達は一体いつまであれを引き裂き続けられるかな？」

「複雑な気持ちですか？かつてあの場所にいた貴方としては」

ステイルは少し複雑そうな顔をして

「いつものことだろ、それよりアリスはどうなんだい？」

ステイルは聞いた

『ステイルと同じ意見だよ、それにもう誓ったんだ、もうあの子を悲しませないって』

その意見にステイル達は言葉を失った。神裂達は分っていた。

一番辛いのはアリスだということに

アリスは元々孤独だったしかしインデックスのおかげで今では教会の中でも避けられていない。

アリスにとってインデックスは初めての友達だった。

そして、インデックスは1年ごとに記憶を消される

それでもアリスは

『もう一度思い出を作ろう』

と何回も言っていた。

アリスはインデックスの記憶が消されたときに泣いていた頃があった。

神裂は知っていた

普段は誰にも見していないがアリスの泣き顔を何回も神裂を見た。

そして神裂にアリスが言った言葉

『なんで・・・なんでインデックスの記憶を消さなくちゃいけないの？僕が弱いから？どうして？』

と泣いていたアリスを神裂は慰めていた頃があった

そして神裂は思った

誰よりも悲しいのはアリスだということに

インデックスのおかげでアリスは色々な人に出会えた、そしてインデックスのおかげで初めての友達ができた。

しかし1年ごとに記憶は消される。

それは凄くつらいことだ

しかし、それでもアリスはある決意をした

もう、あの子を悲しませない。

例え自分が悪魔になろうとも・・・

#### 第四話 悲しい現実（後書き）

今回の話はどうでしたか？

誤字・脱字がありましたらご指摘下さい

あと、感想などあれば嬉しいです。

それでは、また

## 第五話 完全記憶能力（前書き）

どうも、漆黒の堕天使です

今回は、神裂のねーちゃんとアリスそして上条の戦闘です  
では、ごきげん

## 第五話 完全記憶能力

結局スーパーから帰ってきた小萌先生は、なんも事情を聞かずに上条達をアパートに泊めてくれた。

小萌先生は、買い物に夢中で忘れたのか全部忘れてくれたのか、それは上条は聞いていない

そして今上条達は銭湯に向かっている

「おっふるっ おっふるっ おっふるっ」

インデックスはそう歌いながら歩いていった。

「とうま、とうま、とうま」

インデックスは上条の名前を何回も言った

「うん？」

「なんでもない、用がないのに名前を呼べるってなんか面白いかも」  
インデックスはかなり上機嫌だった

「ねえ、とうま。聞きたいことがあるんだよ。コーヒー牛乳って何？カプチーノみたいなもの？」

「そんなエレガントなもの、銭湯にはねえ。けどお前にゃあでかい風呂は衝撃的かもな。イギリスはせまつ苦しいユニットバスがメジヤーなんだろ？」

何故コーヒー牛乳のことを聞いてきたのか、それは銭湯に行く前に小萌先生が風呂上りに飲むコーヒー牛乳を飲むレクチャーをしたからだ。

「んー……。その辺はよくわかんないかも」

「どうして？」

「私……気がついたら日本にいたからね。向こうのことはちょっとわからないんだよ」

「うん？、通りで日本語ペラペラなはずだぜ」

「ううん。そういうことじゃないんだよ。私、生まれはロンドンで聖ジョージ教会の中で育ってきたらしいんだよ。でも、こっちにき

たのは一年前くらいかららしいんだね」

上条はインデックスのらしいって言葉に疑問をもった

「らしい？」

「うん。記憶がなくなっちゃってるからね」

インデックスの発言に上条は驚いた

「最初に目が覚めた時は、自分のこともわからなかった。昨日の晩ご飯も思い出せないのに、魔術師とか禁書目録とか必要悪の教会とか、そんな知識ばかりグルグル回って…本当に怖かった……」

「じゃあ…どうして記憶をなくしちゃったのかったのも、わかんねーって言うのか!？」

「うん」

インデックスの言葉に上条は黙り込んだ、その様子を見たインデックスは上条の顔を覗き込んだ

「とうま……。なんか怒ってる？」

インデックスはどうやら上条が怒っていると勘違いしたらしい  
上条は適当に話題を変えた

「そういえば、お前の持つてる写真は大丈夫なのかよ？」

「ほとんどが見えなくなっちゃんだよ、ほら」

そう言っつてインデックスは写真を見せると、少女のような少年は血で見えなくなってしまうていた

「まあ、またそいつに会ったら撮ってもらえばいいじゃないか」

上条は励ましのつもりで言ったが

「とうま……」

インデックスは頬を赤くしてぷくっと膨らませながら当麻を睨みつけがら

「大っ嫌い!!!」

と言い上条は噛み付かれた

インデックにとってこの写真は凄く大切な物だった、失った記憶のことを聞けるかもしれない、なによりインデックスはこの写真の人物に会うことが目的だし魔術関係以外で唯一知ることができたから

で、上条が励ましで言ったつもりでも、インデックスは上条の発言に対して許せなかった

「たく、嘸むだけ嘸んだら一人でさっさと行っちまいがって」  
インデックスは走っていったため上条は一人で歩くことにした。

そして信号が赤になった瞬間異変が起きた

「ん……？あれ……？」

上条が周りを見渡すと、人がいなくなっていた

普段ならこの時間帯は、人がいるはずだった

辺りには車も、人もいなくなっていた

「ルーン」

その時上条の背後から声が聞こえた

「人払いのルーンを刻んでいるだけです」

「てめえは……」

人がまったくいない交差点に一人の女性が立っていた

「…神裂火織、と申します」

女性はそう言った

「…できれば、もう一つの名前は語りたくないのですが」

「もう一つの…？」

「魔法名ですよ」

上条はその言葉に心当たりがあった。ステイルが言った言葉を思い出した魔法名はそれはそれは魔術師にとっては殺し名だということに

「率直に言います。魔法名を名乗る前に、彼女を保護したいのですが」

「嫌だと言ったら？」

上条のその言葉に神裂は長い日本刀に手をかけた

「仕方ありません……。名乗ってから彼女を保護するまで」

神裂の目付きが変わった。神裂は刀を抜いた瞬間、空気を裂くような斬撃が飛んできた

その斬撃は鉄で、できた風力発電のプロペラを両断する

プロペラの片割れは回転しながら歩道橋に突き刺さった

「もう一度問います」

その光景を見て上条は啞然とした。

「魔法名を名乗る前に彼女を保護したいのですが」

「な…何言つてやがる…。てめえを相手に、降参する理由なんぞ…」

…」

そうは言ったが上条の脚はがたついていて

「何度でも問います」

今度は刀を抜かずに触れただけだった。

斬撃が上条に襲い掛かった

そして斬撃によって削られたアスファルトが鉄の破片となり、衝撃波と共に襲いかかってくる

「私の七天七刀が織り成す七閃の斬撃速度は、一瞬と呼ばれる間に七度殺せるレベルです。必殺といっても間違いではありませんが…」

「（くっそ、一発も見えなかった、だけど…この右手なら）」

…」

そして上条は神裂のところ走りだそうとしたが…

『3日ぶりだね、上条当麻』

「てめー!!!」

アリスが現れた

『上条当麻、最後のチャンスだ、あの子を渡せ』

上条はなにも言葉を返さずアリスの方へ走って行った

『はあ…我が血を生贄に、暗黒の力よ、全てを突く槍と化し、その槍に突かれしものは石と化す、漆黒の槍よ彼の者に永遠の絶望を!』

アリスは素早くナイフを取り出し自分の指を切り血が魔法陣を描き魔術を発動させた

そしてアリスの手には細長く黒い槍があった

『魔槍グラッジ、この槍の特徴は全てを突きそして石化させることができるんだよ』

そう言いアリスは魔槍グラッジを投げた

その速さはかわせるものではなかった

上条は右手を突き出しグラッジを防いだ

『やっぱりね、その右手で魔術を消しているだろ』

そしてもう一度アリスは上条に槍を投げた

上条は右手を突き出し、魔槍を消し去った

今、アリスの手元には何も無い

上条は拳を強く握りしめて走る

「私のことも忘れてくれては困ります」

神裂の声と共に、斬撃が上条に襲いかかった

コンクリートの道路はボロボロになり、上条もボロボロになった

「アリス、あとは私に任してください」

『分かった』

アリスは二人から少し離れた

そして上条は走り出した

「・・・七閃」

斬撃が上条を襲う

「うわっ！ぐっ！！」

そして上条は吹っ飛んだ

「幾度でも問います」

上条が立ち上がるうとした

神裂は上条が立ち上がるうとしたことに疑問を持った

「何が・・・貴方をそこまで駆り立てるか分かりませんが・・・

・・・七閃」

そしてもう一度上条に襲い掛かった

「くっ・・・ちっくしょう！！」

上条は神裂のところ走り出した

そして上条は右手を突き出した

が・・・

上条の手が逆に引き裂かれた

「(消えない！？)ぐわっ！」

上条はまた飛んでいった

前を見ると糸のような物があつた

ワイヤー

神裂は魔術は使っていないかつた

上条は周りを見ると無数のワイヤーが張つてあつた

「あなた、魔術師じゃなかつたのか？」

上条の言葉に神裂が答えた

「私は魔法名すら名乗ってません、それに七閃を潜り抜けた先は真説の唯閃が待つてます、名乗らせないでください、私はもうあれを二度と名乗りたくない」

神裂は、そう告げた

しかし上条にも引けない理由がある

「降参できるかよ・・・」

「なんですか？聞こえなかつたのですが」

「うるせえ・・・うるせえって言ったんだよこの無感情野郎」

上条は立ち上がったが神裂は容赦なく放つた

「・・・七閃」

しかし上条はなんとか立つていられたそして神裂に近寄ろうとしたが神裂に鞘の付いた状態の刀で突かれそしてそのまま蹴られた

「もういいでしょう？貴方が彼女にそこまでする理由はないはずす」

「なんでだよ、なんで俺を殺さない・・・その気になれば俺を何時だつて必殺できたくせに、あなたはまだ、そこで躊躇つてくれる常識ある人間なんだろう？なら分かるだろ、寄つて集つて女の子を追いかけて周わして刀で背中切つて、そんなこと許せる分けないだろ！お前はそこにいる奴とスタイルとは違うんだろ！」

『なに勝手な戯言を吐いている上条当麻、僕もスタイルも覚悟をしているんだよ、そんな糞つたれな戯言でどうこう言われる筋合いはないね』

アリスの声は冷めたい声だった  
言葉が刃に思えるくらいだった

『そうだね、あの子の怪我を治してもらったから少し教えてあげよう』

そう言いアリスはローブのフードに手をかけた

『僕達は必要悪の教会所属魔術師、そして……』

そう言い彼はついに顔を見せた

『僕達はインデックスの元同僚、インデックスを死なせないために記憶を消している』

上条は啞然とした

目の前の人間はインデックスの写真に写っていた少年

一見少女にも言えるがインデックスが少年と言っていた人だったからだ

「どういうことだよ？記憶を消すって……」

上条はアリスに聞いた

『完全記憶能力って言葉くらい聞いたことあるでしょ』

アリスは言葉を続けた

『インデックスの脳の85%は10万3000冊の記憶のために使われている、だからあの子は常人の15%しか脳を使えない、そして完全記憶能力で忘れることができない、例えばそれが小さな事だとしても、あの子は忘れることができない、そんなことしたら脳がどうなると思う？』

そして少し間を空けてアリスは言った

『一年、それが彼女の限界だ、そしてそれ以上長引いた場合彼女は死ぬ』

上条はその言葉に絶句した

『あと三日、三日後には彼女の記憶を消さなければならぬ』

「………なんでだよ」

「なに？」

「じゃあなんで！単にあいつが忘れてるだけなら全部説明をして

誤解を解けばいい話だろ！なんで誤解したままにするんだよ！なんで敵として追い回してるんだよ！」

上条はそう言った

しかしアリスはなにも動じず答えた

『自惚れるなよ雑種があの子が目を覚ました時、世界はどう映ると思う？禁書目録、魔術の記憶しか残っていない自分の前に魔術師がいたら？仲間だと思える？』

「ああ思えるね！」

『何を根拠にそんなことを言える』

「インデックスはずっとお前の写っている写真を持ってた！自分はお前に会うのが目的だって言ってた！少なくとも自分を信じてくれる人が一人居るってことが分かってたんだよ！」

上条はそう叫んだ

『ッ！そうかい、だけど記憶は三日に消す、それは変えない』

「ふざけんな！自分が信じていた奴が敵だったなんてインデックスが知ったらどう思う？あいつが悲しむに決まってるだろ！！」

『話はこちらまでだ、神裂、あとは頼んだ』

「はい、分かりました」

「待て！！」

上条はアリスを追おうとしたが

神裂の放った七閃により上条は吹き飛ばされ傷だらけになった

そして神裂が攻撃を繰り返していると上条が話した

「記憶を消すのに辛くならないように敵に回るだって？ふざんけんじゃねよ！あんた等の事情をインデックスに押し付けるんじゃねえよー！」

上条は叫んだ

ずっと孤独でいることが上条にはどういことが分からない

しかし、それが正しいなんて認めることができるはずがない

しかし神裂は上条の言葉に怒りが込みあがった

「うるっせえんだよ、ド素人が！！」

上条の叫びは神裂の声によってかき消された

「知ったような口を利くな！！私たちが今までどんな気持ちでの子の記憶を奪っていったと思ってるんですか！？アナタはステイルやアリスを殺人狂のように言いましたけどね、彼らがどんな気持ちであの場に立っているか、初めてできた親友の記憶が奪われる所を見ている事しか出来なかったアリスの気持ちか！アナタ何かに理解できるんですか！？」

神裂は上条に殴り続けた

「そしてアリスはなんて言ったと思います？もう一度思い出を作ってみせるって！」

神裂は殴りつけながら言葉を放った

「私たちだつてがんばった、頑張ったんですよ。春を過ごし夏を過ごし秋を過ごし冬を過ごし、アルバムのページをつめて！……それでも、ダメだったんですよ」

神裂はそう言った

しかし耐えることができなかった、上条はさらに言葉を放った

「テメエは力があるから人を守るのか？違うだろ、そうじゃねえだろ！守りたいモノがあるから力を手に入れたんだろっがッ！」

上条は立ち上がった

「なのに、テメエはこんな所で何やってんだよ！」

上条は拳を握りしめたが

その拳は届かずに倒れた

『まったく、情報を与えすぎ神裂』

アリスが後ろから現れた

『そいつは路地裏にでも置いておけ』

「分かりました」

神裂はそう言い上条を抱えその場から離れた

『はあ……』

そしてアリスは懐からナイフを取り出した

『全てを始まりに戻し、今原始へと戻れ、リライト』

血が魔法陣を描き光りだした  
そして全てが元通りになった

『ふう……』

そしてアリスはその場を後にした  
しかしアリスの眼は悲しそうな眼だった

## 第五話 完全記憶能力（後書き）

今回の話はどうでしたか？

誤字・脱字がありましたらご指摘下さい

あと、感想などあれば嬉しいです。

ちなみに魔槍グラッジのモデルはFeteのランサーのゲイ・ボルグの漆黒バージョンだと思ってくれれば構いません  
それでは、また

第6話 制限時間(タイムリミット) (前書き)

どうも、久しぶりです

なんか、色々と別の小説を見たりしていたら

あっという間に日にちがたってしまいました(笑)  
では、どうぞ

## 第6話 制限時間（タイムリミット）

上条が目を覚まして3日が経った

上条は、ボロボロになっていたが

どうやら、インデックスが包帯を巻いてくれたりしたそうだ

そして、上条は少し安心した

魔術師達は3日後と言っていたが、なにもインデックスの様子が変わってなかったからだ

そして、インデックスが上条に看病をしていると

「あれ？家の前でなにやってるんです？」

月詠小萌の声が聞こえた

「上条ちゃん、なんだか知らないけど、お客さんみたいですー」

と小萌先生がドアを開けると

魔術師達がいた

しかし、今回はアリスがいなかった

「なっ！・・・」

上条とインデックスは驚いた

「ためーら！今更、何しに！」

上条は立ち上がった

そして、ステイルは嘲笑うかのように言った

「ふーん、その体じゃあ、簡単に逃げ出すこともできないのだがね」

「はっ！（そうか、インデックスは今まであいつらから一人で逃げて来たんだ、

けど俺という怪我人を背負うことになれば話が違うインデックスをより安全に確実に

保護をするために俺を・・・）」

そして上条がほとんど諦め出した、その瞬間

「帰って！」

インデックスは両手を広げて、魔術師達に叫び、睨んでいた

「お願いだから、あたしなら、どこにでも行くから！あたしなら、なんでもするから！」

「インデックス！」

上条はインデックスの後ろに走った

「本当に、本当にお願いだから！もう、とうまを傷つけないで！」

そう言ったインデックスにステイルは言った

「リミットまでには、残り12時間と38分、逃げ出さないか、どうか足枷の効果を見てみたかった

けど、予想以上だったね」

「足枷……」

インデックスは上条がいなければ、逃げ切れるかもしれない

しかし、怪我人と一緒に逃げれば、困難になる

つまり、逃げ切れる可能性も失ってしまうということだ

「そのおもちゃを取り上げられなくなったら、もう逃亡の可能性は捨てた方がいい、分かるね？」

そう言い、ステイル達は、出て行った

「大丈夫だよ」

インデックスは言った

「わたしが、取引をすれば、当麻の日常はこれ以上壊させない、これ以上は絶対に踏み込ませないから」

そう言うと、インデックスは上条に倒れた

「インデックス！」

そして、上条達が話していたところを、見ていた人物がいた  
アリスだ

『もしかしたら、あの能力者なら、インデックスを救えるかもしれない、だけどそれを最大主教が黙っているか……』  
とブツブツと呟いていた

『インデックス』

夜になった

あれからインデックスが起きる様子があった

上条はインデックスの様子を見ていた

そして、急に、電話が鳴った

上条は近くにあった、新聞紙をどかし電話に出た

『こんばんわ、能力者』

「アリスだっけ？」

『お互い、名前を知る必要なんてないよ、それで、タイムリミットまでもうちよつとだけだ』

別れは済んだ？』

上条は怒りを抑えながら言った

「言っとくけど、俺はまだ諦めてないぜここは学園都市だ、科学でも記憶は消せるんだ」

『超能力か……』

「ああ、そうだ心を操る能力者なんて、たくさんいる」

『ふーん、それで？制限時間までに用意できるの？』

「上等だやってやるよ」

『ふーん、では最後に素敵な悪足掻きを』

そう言い電話が切れた

上条はとにかく手当たりしだいに、研究所を電話で尋ねた

しかし、一方に出る様子がなかった

「くそっ！」

そう言い上条は電話を置いた

そして上条は、また電話をかけると

ついに出了

「もしもし！」

上条は完全記憶能力について尋ねた

しかし、もうすぐ12時だということを言われ上条は目を開いた

そして上条はインデックスの方を向き啞然とした

そしてタイムリミットとなった

そして3人の魔術師が立っていた

**第6話 制限時間(タイムリミット) (後書き)**

今回の話はどうでしたか？

誤字・脱字がありましたらご指摘下さい

あと、感想などあれば嬉しいです

それでは、また

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0394y/>

---

とある魔術の断罪者

2011年12月11日17時50分発行